

平成30年6月30日(土)

老球の細道422号

6月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ミニ、中学、高校の公式戦が毎週のように開催された。地元で開催されたすべての大会を観戦し忙しく充実した6月だった。残念だったのが、いまだに女子のツーハンドシュートが多勢をしめていたこと。戊申150年、これからは「光は会津から」で。

NBAが終わったら今度はサッカーW杯。あまりにも得点が入らないために1ゲームフルで観戦する粘り強さがない。ましてや「逃げるが勝ち」の戦術を取られてしまうと見ている方としては「ごちそうさま」。サッカーもオーバータイムルールが必要なのでは。

1・読書から

◆「“負けられない”ということは戦略の基本です。まず負けられない体制をつくって、敵が勝たせてくれるのを待つ。自分でできることは負けられないということで、勝てるチャンスは敵がつくってくれる」(『戦略的思考とは何か』中公新書)

ゲーム途中で自滅するチームはディフェンスが崩れる。ディフェンスで失点を防いでいれば相手が徐々にリズムを崩してくれる。「勝つ」ことは人との戦いで有限だが、「負けられない」というのは自分との闘いであり無限である。

2・新聞のコラム等から

◆「考えることは雨乞いのようなものである」(朝日・折々のことば・野矢茂樹)

日々の散歩、ランニング中に思いもよらないアイデアが突然わいてくることがある。問題意識を携えながら、色々な所にアンテナを張って無心で待つところに神が降りてくる。

◆「朝は希望に起き、昼は勤勉に働き、夜は感謝に眠る」(朝日・福岡伸一の動的平衡)

ある政治家の座右の銘。このように健全に生きられたら。私は夜は酔いつぶれて眠る。

◆「チャレンジしなければ、れんがは積めない。勝てなければ、上には積めないかもしれないが、チャレンジすれば、横には積める。それで土台が広がり、次につながる。腰が引け、精神的にひるんだ戦いをすれば、なにも残らない」(サッカー元日本代表監督・岡田武史) 勝てそうだったが、惜しいところで残念ながら負けという試合を何度も経験した。相手が日本一のチームでも抵抗することを習慣とすればバスケの神様は時々微笑む。

◆「正確な言葉がなければ、深い思考はできない。深い思考がなければ、人生は動かない。自己検証する。自己否定する。それを繰り返し、繰り返し、自己嫌悪との葛藤の末に自分の言葉を獲得する。その言葉で、思考して、思考して、思考し切る。その格闘の末に自己肯定して立ち上がり、人生を切り開く。読書はそのための最も有効な武器だ」(見城徹『読書という荒野』)

名将は例外なく読書家である。考える言葉の材料の質と量が豊富であれば、自分で考えることのみならず、選手に伝えるメッセージの内容も充実する。読書の習慣は財産である。

◆「米国スポーツ、とりわけアメフト指導者は、国造りを担っている。若者の未来を壊さないように三つのゴールを持っている。①選手を育て勝利を目指す②選手の人生に責任を持つ③競技引退後に国を背負って立つ未来のリーダーを育てる」(朝日・私の視点)

コーチングの仕事はすぐにはわからない。選手たちが大人になって人間的に成長を遂げたことが明らかになった時、指導者は評価される。常に問う「お前はできたのか？」と。